

2014年1月28日

各位

大学英語教育学会(JACET)教育問題研究会

代表 久村研

「言語教育エキスポ 2014」開催について(案内)

時下ますます、ご清栄のこととお慶びを申し上げます。

さて、JACET 教育問題研究会では、神保尚武(早稲田大学)科研費研究と西山教行(京都大学)科研費研究の支援を受けて実施した 2013 年度研究成果報告会を次頁の要領で開催することとなりました。言語教育エキスポ 2014 の大会テーマは、「外国語学習のための動機づけ」です。

また、今回は、喫緊の課題として浮かび上がった小学校の英語教育教科化を考えるシンポジウムを卯城祐司先生(全国英語教育学会会長・小学校英語教育学会会長・関東甲信越英語教育学会会長)、竹内理先生(外国語教育メディア学会会長)、神保尚武先生(大学英語教育学会会長)をシンポジストとして開催することになりました。

この言語教育エキスポ 2014 に参加希望の方は、2月28日までにその旨を書いたメールを shien@cuc.ac.jp までお送りください。先着 300 名までに参加証をメールでお送りします。

共催団体は以下のとおりです:

神保尚武科研(早稲田大学)基盤研究(B)、西山教行科研(京都大学)基盤研究(A)
境一三科研(慶應義塾大学)基盤研究(A)、林田理恵科研(大阪大学)基盤研究(B)、
大木充(京都大学)基盤研究(B)、相澤一美科研(東京電機大学)基盤研究(B)、
清田洋一科研(明星大学)基盤研究(C)、砂岡和子科研(早稲田大学)基盤研究(C)、
酒井志延科研(千葉商科大学)基盤研究(C)、藤尾美佐科研(東洋大学)基盤研究(C)、
中山夏恵科研(共愛学園前橋国際大学)基盤研究(C)、安達理恵科研(愛知工科大学)基盤研究(C)、
高木亜希子科研(青山学院大学)若手研究(B)、松岡里枝子科研(国立看護大学校)基盤研究(C)
日本フランス語教育学会:代表 古石篤子(慶應義塾大学)
日本メディア英語学会:代表 染谷泰正(関西大学)
日豪NZ教育文化学会(JANTA):代表 久村研(田園調布学園大学)
日本ロシア語教育研究会:代表 柳町裕子(新潟県立大学)
日本ロシア文学会教育委員会:委員長 黒岩幸子(岩手県立大学)
日本イスパニヤ学会:代表 野谷文昭(東京大学)
中国語教育学会:代表 佐藤富士雄(中央大学)
朝鮮語教育研究会:世話人代表 長谷川由起子(九州産業大学)
日本独文学会ドイツ語教育部会:部会長 境一三(慶應義塾大学)
日本英文学会関東支部英語教育・学習研究会:会長 斎藤兆史(東京大学)
外国語教育メディア学会 九州・沖縄支部:支部長 島谷 浩(熊本大学)

言語教育エキスポ 2014 プログラム

大会委員長 神保尚武(早稲田大学)

日時:2014年3月9日(日) 場所:早稲田大学 11号館 4階会議場 406, 407, 408, 409, 410

参加費無料, 事前登録必要

406 会議室

9:00-10:30 シンポジウム 1:小学校外国語活動---外国語学習の初めに学習者をどのように動機づけるか。

司会・提案:安達理恵(愛知工科大学) 小学校外国語活動:外国語学習の初めに学習者をどのように動機づけるか「このシンポジウムでは, 小学校の先生を中心に, 外国語活動において児童をどのような方法で動機づけると良いかについて話し合う。現行の活動についての課題, 「英語の外来語」をテーマとした授業の視聴, また小学校英語教育の実践経験豊かなシンポジストから児童の動機づけに関する体験談を交えながら, 動機づけについて意見を交換し, さらにフロアからもご意見を頂くことで, 英語の教科化に対する意見も含め議論を展開する」。

シンポジスト:北野ゆき(守口市立春日小学校) 体験からの発見, 気づきを大切にした外国語活動「普段から気づきや発見を大切に, それを言語化することを習慣づけている。言語化することで概念形成ができると考えるからである。自分で思考すること, 仲間と話し合うことも大事にしている。言葉への気づき, 日本語との違い, 文化の違いを子ども自身が発見できるように, 身体を使い, 言葉を使い, 考えることを大事にして, 丁寧に指導していくのが小学校外国語活動の時間だと考える」。

シンポジスト:犬塚章夫(刈谷市立小垣江小学校) 小学校5・6年生をどのように動機づけるか—Hi, friends! の実践を通して「Hi, friends! 1 の Lesson 7 What is this? でクイズ大会に興じる5年生。Hi, friends! 2 の Lesson 6 What time do you get up? で時差を問題にしてもポカンとする6年生。小学英語導入以前の中学1年生への動機づけで通用したことが, 小学校5・6年生に通用しない。きっとそれは小学生の視野, 社会(世界)との関わり, 他教科の学習内容, 発達段階などが関係しているのであろう。実践を通して分かってきたことを紹介したい」

シンポジスト:牧野眞貴(近畿大学) 国際理解の視点から小学校外国語活動の動機づけを考える「発表者が小学校教員外国語活動指導力養成講習を担当する中で, なぜ英語を学ぶのかを子どもたちに明確に伝えていない教員が少なからずいることがわかった。「英語が話せると将来役に立つ」という目標も聞かれたが, 自己の利益につながる外国語活動で良いであろうか。シンポジウムでは, 純粹で優しい子どもたちが, 心から英語を学びたいと思う動機づけについて, 筆者の体験をもとに紹介する」。

10:40-12:10 基調講演 Jonathan Newton (Victoria University of Wellington, NZ) **Motivating learners through intercultural communicative language teaching (iCLT) 異文化理解による言語学習で学習者を動機づけること**「Recent decades have seen growing acceptance of the importance of the 'intercultural' in second/foreign language teaching and learning. Intercultural content can be profoundly motivating for language learners, not least because it offers a voyage of discovery towards, and engagement with, the cultural worlds that lie beyond their familiar cultural milieu. In this talk I will present a theoretical rationale and practical suggestions for interculturally-oriented language teaching, focusing on the motivating power of intercultural

content in the language classroom. I will describe a set of principles and practical examples to guide teachers towards intercultural Communicative Language Teaching (iCLT) (Newton, 2009).

12:10-13:00 昼食休憩

13:00-14:30 **シンポジウム 2:英語教員のための省察的ツールの意義** J-POSTL 完成版披露を兼ねて

司会・提案:久村研(田園調布学園大学) **英語教師のための省察的ツールの意義—J-POSTL 完成版披露を兼ねて**「本シンポジウムは、JACET 教育問題研究会が足掛け 5 年をかけて開発した「言語教師のポートフォリオ」完成版を披露し、この文書の普及可能性と今後の英語教師教育改善への影響について、お二人の英語教育のプロを招いて議論を深めることを目的としています。現在、Can-Do 形式での英語到達目標の導入や教員評価が行われていますが、本文書が言語教師教育の分野から、言語教育の枠組みの再構築に向けて具体的な役割を果たすことが期待されます」

シンポジスト:金谷憲(元東京学芸大学), 柳瀬陽介(広島大学)

14:45-16:45 **シンポジウム 3:英語以外の外国語教育について—2012 年に実施した全国調査の結果をもとに、第 2 外国語の学習者の動機づけと教師の意識について研究を発表し討議する。**

司会:林田理恵(大阪大学), 指定討論者:姫田麻利子(大東文化大学)

シンポジスト:大木充(京都大学) **各言語間の動機づけの特徴と研究のまとめ**「自己決定理論に基づく質問紙によるアンケート」を分析した結果、学習者の動機づけが高い言語は、韓国・朝鮮語とロシア語で、低いのはドイツ語と中国語である。動機づけの質を調べるために行った「期待・価値理論に基づく質問紙によるアンケート」を分析した結果、学習者がやさしいと感じている程度は、韓国語が最高で、ドイツ語が最低である。学習者にとっての実用的価値は、中国語が一番高く、ロシア語が一番低い。フランス語とスペイン語はつねにこれらの言語の中間である」

シンポジスト:砂岡和子, 山口高嶺(早稲田大学) **いまどきの仏独中西韓露語の授業現場—2012 全国 6 言語教員意識調査の分析—**「2012 年春、全国の大学・高等学校の第二外国語履修者大規模アンケートと平行して実施した、仏独中西韓露語 6 言語の担当教員、計 750 名の授業に対する回答結果に基づき報告を行う。質問項目は「クラスサイズ」や「語学レベル」など学習環境以外に、「授業内容や目的」「授業方法」「学生の態度」「クラスの雰囲気」など 10 項目に及ぶ。分析の結果、6 言語間に温度差はあるものの、英語以外の外国語教員もコミュニケーションと学生とのインタラクション重視の授業運営を目指す傾向が判明した。発表では教員の意識を通して見る第二外国語の授業現場の姿を、6 言語別に考察する」

シンポジスト:藤原三枝子(甲南大学), 長谷川由起子(九州産業大学) **教師の意識・教え方等と基本的心理的欲求・動機づけの関係**「2012 年に全国の大学で実施した英語以外の 6 つの外国語の学習者の動機づけに関する調査紙調査の結果の一部を自己決定理論に基づき分析する。自己決定理論によれば、学習者の基本的心理的欲求の充足度が高まると、動機づけはより自己決定的になる。教師の教え方や態度が、学習者の心理的欲求の充足度を高め、学びによりつよく動機づけられることが望まれる。本研究は、担当教師のアンケート回答結果と学習者の基本的心理的欲求の充足度との関係の分析を通して、日本の大学における英語以外の外国語の学習／教育の実情を明らかにする」

シンポジスト:堀晋也(京都大学) **6(仏独中西韓露)言語の学習動機の自由記述文の質的分析**「2012 年度前期実施の 6(仏独中西韓露)言語調査では、尺度を用いた量的調査と平行して学習動機(なぜその

言語を勉強するのか)に関する自由記述式の調査も行なった。本発表では、質的分析を用いた頻出語彙の共起ネットワーク分析の結果をもとに、各言語における学習動機の傾向を提示する。ここで言語間の共通点、相違点を見出すことによって、量的調査の分析結果を考察する際の材料としたい」

17:00-18:30 シンポジウム 8: 小学校英語教育の教科化について考える

司会:高木亜希子(青山学院大学), 指定討論者:犬塚章夫(刈谷市立小垣江小学校)

シンポジスト:卯城祐司(全国英語教育学会会長・小学校英語学会会長・関東甲信越英語教育学会会長)
教科化検討の前に解くべき「連立方程式」「小学校における英語教育の改善は、小学校免許、教員養成、研修、財政措置から文字の扱い方まで様々な要因が絡む「連立方程式」である。ただ単に実施学年の早期化、指導時間増、教科化、専任教員配置等を行っても、過剰な期待を抱かせる割にさほど効果は見込めない。現在行っている外国語活動の成果や課題のしっかりとした検証がなされないまま、中学校英語を一部前倒しすることは、児童の英語力の二極化や英語への抵抗感を増加させる危険性もある」
シンポジスト:竹内理(外国語教育メディア学会会長) **ウイッシュ・リストからの脱却を目指して**「小学校英語の教科化と、それをめぐる昨今の言説を聞くと、ウイッシュ・リスト的な考え方が支配的なように感じる。足し算の教育は、確かに耳に心地よく、希望に満ちあふれているかのように聞こえるが、持続可能性の面から見れば大いに問題がある。では、何を、どこから、どれだけ引くのか。この議論に必要なのは、世論でもなく、経験や勘でもなく、ましてや精神論や理想論でもない。本シンポジウムでは、この議論のあるべき姿について私見を述べてみたい」

シンポジスト:神保尚武(大学英語教育学会会長) **「願望の政策」から「責任ある政策」へ**「今回の文科省英語教育政策は「願望の政策」であり、「責任ある政策」とは言えない。性急の感を否めない。「英語教育の早期化よりも質的充実」を先行すべきだ。小生の提案のポイントをあげたい。1) クラス定員を 20 人以下にする。2) 5 年生の外国語活動 1 時間は言語に対する意識を目覚めさせる。3) 6 年生の英語を 2 時間として教科化する。4) 英語専科教員を各小学校に配置する」

407 会議室

9:30-10:00 清田洋一(明星大学) **外国語学習における My Time Line-自律的に継続する外国語学習への支援**
「学習者が学校という枠を越えて、自律的な学習を継続することを支援する言語ポートフォリオの開発とその実践方法の研究に関する発表である。その主要な要素は3点ある。学習者個人の立場からは、外国語の学習者としての自己イメージの強化、および学習の目標設定と自己評価につながる CAN-DO リスト、そして指導する教師の立場からは、生徒という枠を越えた個人の様々な資質(社会性につながる資質)を意識した指導である」

10:00-10:30 長沼君主(東海大学) **Can-Do 評価と観点別評価の位置付けと関連性に関する一考察**「『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』が公表され、中高では学年ごと及び卒業時の学習到達目標を Can-Do リストの形で設定し、具体的に年間指導計画と単元計画に反映させることが期待されるようになったが、観点別学習状況評価とはどのように関連させることができるのだろうか。理解・表現以外の関心・意欲・態度や言語・文化の観点の位置付けなども踏まえて議論をする」

10:40-11:10 平瀬洋子(広島国際学院大学) **専門分野と「動機づけ」の関係**「情報デザイン学科で絵やイラストを描くのが得意な学生たちに、まず最初、『エコに優しい架空の商品開発』をグループでさせ、それを大きな1枚の用紙に描かせた。次に、その絵を使って、開発した商品について英語でプレゼンテーションを

させてみると、結構上手く英語を使いこなした。この結果から、英語が嫌いな学生でも、自分の専門分野と何らかの関連性があれば、それが「動機づけ」になり、英語に関心を示すことが理解できた」

11:10-11:40 石井研司(立命館大学) 英語リメディアル教育における協働学習、自己効力感、メタ認知方略の関係性に着目した授業デザインの展望—自己調整学習の観点から「本発表では、英語を苦手とする大学生を対象に行われたさまざまな授業改善・実践から明らかになった「協働学習」「自己効力感」「メタ認知方略」の関係性を中心にまとめ、さらに自己調整学習(Self-regulated learning)の観点から授業内容・構造についてのデザインの可能性、学生の自己効力感を促進させながらも学習意欲を駆り立てていく授業(カリキュラム)モデルを検討し、今後の英語リメディアル教育領域での展開・展望を模索する」

12:10-13:00 昼食休憩

13:00-13:30 恒安眞佐(宇都宮大学) 個人差を活かした英語活動(ワークショップ)「より良い授業を運営するために、学生の個人差、特に学習スタイルと性格を把握し、より多くの活動を取り入れることが1つの要因となる。この発表(ワークショップ)で、(1)個人、(2)ペア、(3)グループを対象とした英語活動を紹介する。人数、年齢、英語能力に臨機応変に対応できる、簡単で且つ個人差に焦点を当てた活動である。そして、学生の反応、実施した教師の反省点&改善点を報告する」

13:30-14:00 浅野享三(南山大学)、山口高領(早稲田大学) 学生同士で学んでいく音読劇(Readers Theatre)「英語力はスコアで示す以外に方法はないのだろうか。本発表が提案する音読(Readers Theatre)は、他者との関わりの中で成長を促すための協同的経験を基礎にしている。具体的には、TOEIC470 未満の大学生を対象に行った 5 回の授業を学習者からのコメント付きで紹介する。音読劇の特徴として共に学んでいく実感の向上、そして読解・表現・発信力の向上を伝えたい。ビデオを利用して学生発表の様子を一部紹介する予定である」

14:00-14:30 平野順也(熊本大学)、牧野眞貴(近畿大学) 習熟度の低い大学生を対象とした英語授業意識調査—動機づけのヒントを求めて—「英語リメディアル教育は担当教員の裁量に委ねられている場合が多く、学習者も苦手意識や要求、そして目標などが十分に反映されたものではない。昨年、発表者たちは現状を把握するため、担当教員を対象に理想、活動内容、問題などについての調査を行った。本発表では、学習者に焦点をあて、彼らのもつ理想、目標、希望する取り組みなどについて行った質的調査の報告を行う」

14:45-16:45 シンポジウム 7: 異文化理解教育は学習者をどのように動機づけるか

司会:中山夏恵(共愛学園前橋国際大学) 発表の背景と目的「外国語教育を通じた生徒の異文化間能力育成の重要性に対する認識は、世界的に高まりつつある。日本でも同様で、外国語学習指導要領(2009)の目標では、言語と文化への理解を通じ、異文化間能力を備えた人材育成が期待されている。加えて異文化の指導は、学習者の動機づけにも影響するという側面もある。本発表では、英語授業における異文化指導の実践例を紹介し、その意義と動機づけに及ぼす影響を考察する」

シンポジスト:吉浦潤次(大阪府立交野高校) 異文化の題材で生徒のコミュニケーションへの意欲を高める—マララ・ユフザイの国連スピーチを用いて「世界の中の自己を意識させる目的で、これまで映像を使った授業を行ってきた。2012 年にパキスタンのマララ・ユフザイが国連で行ったスピーチは極めて感動的であり、16 歳の少女が日本の高校生に与える衝撃は大きいことが予想された。2 学期にその内容理解をグループで、その後各自で日本語要約、感想の英作文、さらにそれを暗誦発表させた。優れた教材は生徒の心を揺り動かし表現へと駆り立てることがその発表から窺えた」

シンポジスト:齋藤理一郎(群馬県立太田フレックス高等学校) **外国籍生徒と共生する教室での異文化交流授業実践**「現任の定時制高校には外国籍生徒が多数入学し、その国籍や英語学習歴も多様である。彼ら彼女らと日本国籍の生徒が混在する多文化の教室で、日本の検定教科書を使用することは、授業中の活動自体が異文化理解の機会となりうる。本発表では、「コミュニケーション英語Ⅰ」の教科書を用いたワンレッスンの実践を報告し、高校生が文化の多様性に触れ、自分と他者の価値観の違いを受容していく過程の一例を紹介する」

シンポジスト:栗原文子(中央大学) **異文化間能力の可視化への可能性を探る**「実践例をふまえ、欧州評議会による「言語と文化の多元的アプローチとその参照枠(FREPA)」などを参照しながら、生徒に涵養される異文化間能力の可視化を試みる。また、日本の文脈において、生徒の学習意欲とコミュニケーション能力を高めるために、生徒が自らの文化と新しく出会う文化に気づき、差異や共通点を見出しながら、媒介・調停者(mediator)として成長する機会を得ることの重要性を指摘する」

408 会議室

9:00- 9:30 **境一三,丸田千花子,治山純子(慶應義塾大学) 第二外国語科目(既習者クラス)における高校・大学連携に対する意識のアンケート調査について**「大学入学以前に第二外国語科目(独語・仏語・中国語・西語)を学習した経験のある学生(既習者)の習熟度を把握し、第二外国語教育の一貫性について現状を把握するために行ったアンケート調査の結果について発表する。調査対象者は「既習者クラス」の1年・2年生、および当該科目担当の教員である。本発表では、高校・大学連携に対する履修学生と教員の意識についての結果を示した上で、カリキュラム・教材開発における高校・大学の効果的な連携の可能性を議論する」

9:30-10:00 **西垣知佳子(千葉大学),内山将夫(情報通信研究機構),鈴木純美子(開隆堂出版),砂岡和子(早稲田大学) 日英中韓共同プロジェクト4ヵ国語学習教材の開発—多言語学習の動機づけとマルチ・カルチャー接触とその対処法—**「日英中韓の言語教師と出版社が共同して多言語学習教材を作成した。教材は学習者の動機づけに配慮し、語彙習得を目指した。本教材はひとつの学習語に対して、日英中韓の各言語が明示的、暗示的に包含する文化・生活を含めて学ぶことができる。教材開発の過程では、多言語接触による様々な異文化摩擦が生じた。発表では、作成した多言語教材と、国際共同編集で生じた多言語・多文化接触に起因する摩擦とその対処法について報告する」

10:00-10:30 **勝又恵理子(青山学院大学) 英語教育における異文化コミュニケーション能力の養成と動機づけ**「近年、日本の小学校・中学校・高校における多様な言語背景をもつ生徒の増加により、教員の異文化コミュニケーション能力の重要性が高まっている。本調査では、教員志望の大学生の英語の授業に異文化コミュニケーションを取り入れることで、学生の英語学習に対する影響を探るため、アンケート調査を実施し計量的分析を行なった。分析の結果、授業が学生の異文化に対する意識に肯定的な影響を与えていることが確認された」

10:40-11:10 **林田理恵(大阪大学),金子百合子(岩手大学) 全国6言語アンケート調査結果(第2回中間報告)とロシア語教育の方向性**「本発表では、2012年度に実施された全国6言語アンケート調査結果について第2回目の中間報告を行う。今回は特に1) 質問1・2について学部系統別分析で観察される傾向性、2) 質問3、英語以外の言語を学ぶ必要性・学習理由に対する自由記述回答の質的分析結果、3) 調査対象に含まれる高等学校、高等専門学校の学習者特性について明らかにし、合わせて、2月に行う予定の高校ロシア語課程の実態調査結果にもふれる」

11:10-11:40 王松(関西学院大学),古川裕(大阪大学),砂岡和子(早稲田大学) **あなたはなぜ中国語を勉強しているのですかー2012 全国調査に基づく中国語履修者回答分析ー**「全国からの5千名近い中国語履修者の有効回答を基に報告する。本発表では特に,学習動機づけに関する選択式設問を補完する目的で設けた自由記述回答について考察する。中国語学習者の最大の履修動機は「実用志向」,次に「語学的関心」が続く。「中国文化や中国の歴史」への興味は低い。発表では加えて,学習自律度の高群校と低群校の特徴要因を挙げ,個性に応じたやる気を引き出すための教育方法について論ずる」

11:40-12:10 小川敦(大阪大学) **移民国家ルクセンブルクにおけるドイツ語識字教育の課題**「ドイツ語,フランス語,ゲルマン語である土着のルクセンブルク語が用いられるルクセンブルクでは,ルクセンブルク語が母語であることを前提に,ドイツ語を識字の言語として習得し,その上でフランス語の習得が行われる。現在,人口の40%以上がポルトガル人に代表される外国籍であり,彼らの子弟の多くがドイツ語の習得に問題を抱えている。本発表では,現在の言語教育政策の現状と問題点を見た上で,ルクセンブルク政府の施策を検証する」

12:10-13:00 昼食休憩

13:00-13:30 姫田麻利子(大東文化大学外国語学部) **大学生の「言語ポートレート『言語ポートレート』とは,いろいろな言語と自分の関係を表す自画像のことで,ヨーロッパで移民の子どもを対象に提案された活動である。日本の大学の教室でも言語選択理由等の調査はよく行なわれているが,「言語ポートレート」は複数言語の相対化,また社会的価値観から独立した価値観の意識化にとくに有効で,外国語イメージ調査に新しい観点をもたらす。大学生の『言語ポートレート』を紹介し,導入の利点について議論したい**

13:30-14:00 大澤麻里子(東京大学) **イタリアヴァッレダオスタ州におけるバイリンガル教育とその課題**「フランスと国境を接するイタリアのヴァッレダオスタ州は,イタリア語と地域公用語であるフランス語,そして歴史的少数言語であるフランコ・プロヴァンス語が日常的に用いられる多言語地域である。本発表では,同地域のフランス語・イタリア語のバイリンガル教育政策を概観し,統計資料や現地でのインタビューで得た知見を基に学習者の動機付け,指導方法,社会の変化など様々な角度からその課題を分析,検証する」

14:00-14:30 田原憲和(立命館大学) **世界と「つながる」ための動画作成プロジェクト**「本発表では,ドイツ語の授業の一環として取り組んだ動画作成プロジェクトについて報告する。この授業では,プロジェクトの目標とルーブリックによる評価方法をあらかじめ提示した。本プロジェクトが学習者の学習姿勢にどのような影響を及ぼしたのかを考察するとともに,初学者が外国語を通じて世界と『つながる』ことの意義 についても考えていく」

14:45-16:45 **シンポジウム 6: 実践と研究の架橋となる質的研究:英語教師による学びと変容**

司会・提案:高木亜希子(青山学院大学)「本シンポジウムの目的は,英語教育における実践を深めるために,様々な視点で質的研究を活用できることを提案し,参加者自身にそれぞれの文脈で実践と質的研究の関わりの可能性について考察していただくことである。各シンポジストが異なった立ち位置に基づき,これまでどのような視点で質的研究を通じた実践の探求を行い,どのような学びや変容があったかを報告する」

シンポジスト:河田浩一(愛知県立熱田高等学校) **Exploratory Practice を通じた動機づけ:**

質的調査を通して「教室生活の質」を高める探求的实践「本発表では,夜間定時制高校で英語を教え

る発表者が、英語が苦手な生徒が多い教育現場で苦悩する過程で、質的研究及び Exploratory Practice (Allwright, 2003) に出会い、それに基づく実践を行うことにより、どのように発表者及び教育現場が変容していったかを報告する。特に、「教室生活の質」を最優先し、質的調査を活用しながら、支援的な態度で学習者に寄り添っていくことの醍醐味をフロアの皆様と共有したい」。

上條武(立命館大学) **読解ストラテジー評価に学習ログを採用した実践研究: Research Portfolio に基づく研究の立ち位置の考察**「本発表では、大学で読解ストラテジーの評価に学習ログを採用した研究の報告を行う。本研究は、Auerbach and Paxton (1997) のデザインをもとにしている。発表者は、Research Portfolio における本研究の位置づけ、学習ログの研究手法、結果、Mix Methods による今後の研究に言及する。Research Portfolio による授業研究の発展性、授業改善と研究についても考察を加える」。

東條弘子(東京大学大学院生), **吉岡順子**(町田市立町田第一中学校) **教師の発問と意識変容過程の検討: 中学校英語科における教室談話分析**「本発表では、中学校英語科文法指導と内容重視のコミュニケーション活動実践における、研究協力者教師(教歴 26 年)の 3 年半に亘る発問と意識の変容過程を明らかにする。授業を観察し教室談話の様相を検討した結果、教師は生徒の応答が予測できない真正な質問を発し、母語で生徒の認識を尋ねるようになり、授業で生じた事実在即した内省的なコメントが増加した。発表では、当該教師が自身による「学びと変容」について語る」。

409 会議室

14:45-15:15 **黒川敦子**(名古屋大学大学院) **日英音素の差異への気づきを促す小学校でのフォニックス指導の試み: 指導結果から**「書記素と音素の関係が複雑な英語学習には、音と文字とを丁寧に関係づける指導が必要である。本研究では公立小学校の6年生 102 名を対象に、日本語と英語の音の差異への気づきを促すフォニックス指導の効果を調査した。外国語活動 10 分程、7 回の指導を実施した。指導の事前・事後のテスト結果に有意な差が認められた。また、正答率を調査したところ、下位群の向上が認められた。フォニックス指導の導入は、音素認識力が弱い児童の認識力を高める可能性が示唆された」

15:15-15:45 **加藤拓由**(神屋小学校) **小学校英語に学級担任が関わることの重要性～児童の動機付けと、学びの構造に着目して～**「文科省は小学校高学年から英語教育として実施する方針を発表しました。また、指導者としては、学級担任のほか、専門教員の活用も視野に入れています。小学校における英語教育において学級担任が関わることの意義は何なのか？学級担任が児童の学習の動機付けにてどのように関わっているのか？実践結果のデータ(アンケートなど)を通して提案したいと考えます」

15:45-16:15 **安達理恵**(愛知工科大学) **小学校外国語活動における児童の英語に対する動機づけと異文化に関する態度特性に関する実証的調査研究の総括**「本発表では、外国語活動における児童の動機づけと異文化の人に対するコミュニケーション態度について、これまでの小学校数校で調査した研究結果、すなわち、外国語活動時間増加に伴う動機づけとコミュニケーション態度の変化、および、動機づけやコミュニケーション態度の要因分析を総括する。また、特に男女差の結果、すなわち、動機づけとコミュニケーション態度のいずれも、女子の方が高いという結果とその要因の考察を加えて発表する」

16:15-16:45 **相澤一美**(東京電機大学), **酒井志延**(千葉商科大学) **小学校外国語活動における教員の英単語意識調査**「文科省は、指導要領改訂スケジュールを発表し、2015 年から先行実施、2016 年から教科書検定を実施すると発表した。しかし、教材作成のための資料は不十分であり、特に語彙の選定についての指針はない。本研究では全国調査実施した。その結果、指導は 4 段階に分けることができた。第 1 段階

目では、単語レベルを抑揚などで yes, no で答えさせている指導。第2段階目で、肯定文や疑問文、否定文などを使つての指導。第3段階目では、why-because の指導も行われていることが推察できた」。

410 会議室

9:00-10:30 **シンポジウム 4: 文学指導は学習者をどのように動機づけるか。** 関戸冬彦, 柳瀬陽介(広島大学), 和田玲(順天中学・高等学校), 鈴木章能(甲南女子大学), 中垣恒太郎(大東文化大学)「今日英語教育では実用技能の向上を目指した授業が多いが、高校生, 大学生に, 人生や人間の真実を思考させなくてよいのだろうか。そこで文学教材の意義を問い直したい。文学教材の扱い方次第では, 英語の技能向上にも寄与しつつ, 学習者が自己拡大を感じることで積極的な学習姿勢の構築, 動機づけ, が可能になるのではないか。これらの点を中心に, 高校, 大学での実践, 英文学, 英語教育の連携, を探るべく五人の論者で発表を行う」

10:40-12:10 **シンポジウム 5:批判的ディスコース分析(CDA)の言語教育への応用**

シンポジスト:石上文正(人間環境大学)『男はつらいよ』の寅さんの口上の“深み”に向かって「ことばやテキストは, その表面の下に“深い”意味が潜んでいる。語学の授業では, その表面的な理解で終わってしまう場合が多いと思われる。ことばを学ぶ目的の一つは, ことばの不思議さやその“深さ”を知ることにあると考えている。本発表では寅さんの有名な口上をディスコース分析し, その“深い”意味に迫ろうというものである。ことばの“深さ”とそのための分析手法を知るとは, 学習の動機付けの一助になると考えられる」。

シンポジスト:相田洋明(大阪府立大学)日英の royal baby 誕生報道の分析「ノーマン・フェアクラフが『ディスコースを分析する』などで唱導する批判的ディスコース分析の手法を用いたテキスト分析が, 言語教育における外国語テキスト読解の動機づけと実践にどのように寄与しうるかを示す。テキストとそのテキストを「読む」行為をつねに社会的な文脈のなかで捉えることがポイントである。分析対象テキストとして, New York Times がイギリスの王室と日本の皇室の royal baby 誕生を報じた記事を用いる」。

シンポジスト:高木佐知子(大阪府立大学)ウェブページの企業紹介の分析「言語使用と社会の構造との関連を研究する批判的ディスコース分析の観点を用いたメディア英語のテキスト解釈の手法を, 英文読解の授業でどのように応用することができるかについて論じる。ウェブページの企業紹介のテキストを対象とし, ノーマン・フェアクラフの方法論を用いて, 語彙・文の構造・前提・表象などを社会のコンテキストと結びつけて分析し, どのようなメッセージが明示的・暗示的に伝えられているのかを明らかにする」。

12:10-13:00 昼食休憩

13:00-13:30 **篠塚勝正(日本メディア英語学会)初級英語学習者への音読指導による英語力向上とモチベーション及び学習方略の関係**「音読訓練が, 英語を専攻としない初級英語学習者の英語力向上に効果があるかを調査した。3 か月間に及び実験では参加者を音読群 vs. 非音読群に分け, TOEIC Bridge®の Pre vs. Post-test のスコアを計測した。その結果, 音読群において Listening , Reading 共に Post-test のスコアが有意に高くなった。また, 参加者のモチベーション及び学習方略に関するアンケートとスコアとの関係についても言及する」

13:30-14:00 **塩見佳代子(立命館大学)英語学習の動機づけを促す提案型ビジネスプレゼンテーション:社会起業家に向けて行うアイデアの発信**「英語のクラスで教室と社会をつなぐ取り組みとして, アメリカの社会起業家に向けて日本での流通販路の可能性を調べて発表するタスクを導入した。学生は社会起

業家からのお礼のメールを受け取り,自分たちのアイデアが少しでも相手に役に立つことを知り,英語学習の動機を高めると同時に英語をツールとして各自のアイデアを発信することの大切さを学んだ。本発表では,英語学習の動機づけを促す提案型プレゼンテーションを紹介する」

14:45-16:45 **コンテスト型ワークショップ: 大学英語教育をビジネスの実践にどう結びつけるか。**

司会・提案:藤尾美佐(東洋大学)

第1部 大学生によるビジネス英語プレゼンテーション・コンテスト,一次審査を通過したトップチームによる,実際の企業の商品を使ったプレゼンテーション・コンテスト。大学教員,ビジネスマン,会場参加者によるその場の審査で優勝が決まる。ビジネスの視点を取り入れることで,内容の一貫性や説得力など,トータルな英語プレゼンテーション能力を向上させる狙い。

第2部:「大学英語教育をビジネスの実践にどう結びつけるか」の討論会

18:45-20:15 懇親会 英語教育界のロックスターと言われる関戸冬彦先生のパフォーマンスが入ります。イタリア料理とハワイアンのお店です。お一人 4000 円です。お申し込みは, shien@cuc.ac.jp です。

なお,会議室の広さは異なり,収容能力には差があります。したがって,参加者の実情により,会議室の変更は前日までのメールでお知らせします。